祈ること、はじめること

丸山空大

祈るという行為には、どこか法外なところがある。キリスト教は祈りの宗教として知られているが、もしその教義がいうように神が全知全能でなおかつ善であるならば、神に祈ることほど不遜なことはないだろう。神が万事取り計らってうまくやっているところに不満を申し立て、予定を変更しろというのだから穏やかではない。しかし、祈りはゆすりたかりとはみなされない。あたかも、人間には全知全能の神に抗弁する権利があり、神の意志や予定を変えるだけの能力もあるかのようだ。

このような、一見不相応ともみえる人間の権能の由来を、「ヨハネによる福音書」（新約聖書中の一篇）の冒頭部から読み取ることができる。「初めに言（ことば）（ロゴス）があった。言は神と共にあった。言は神であった。……万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった」。この、よく知られた、しかし謎にみちた章句は、旧約聖書の天地創造神話の解釈として読むことができる。「創世記」は「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」と伝える。この混沌のなかで神が「光あれ」と言ったとき、光が生成した。さらに、さまざまなものに「あれ」と命じることで、神は万物を存在せしめていった。この句の解釈とみるとき、「言（ロゴス）」という語は論理や概念知であるよりは、話されたことばであるようにみえてくる。

福音書記者が向き合った「創世記」のテクストは単純だが難解だ。神が創造の前から存在していたらしいことはよいとして、混沌や水もまた創造の前から存在したのだろうか？　それともそれらは一種の文飾で、光こそがはじめにつくられたのだろうか？　記者はこの問題に取り組み、神の発言こそが事物を存在せしめているのであるから、神をのぞいてはじめにあったものは「ことば」だ、という解釈を採用するのである。

ここにはことばとはじまりの不思議が主題化されている。ことばは、発される以前から発言者のなかにありながら、しかし、発されるまでどこにも存在しない。発されるとともに事物と歴史を存在せしめる神のことばの不思議な力も、ことば自体のこうした性質と類比的にとらえられている。存在と時間が、まさに神のことばとともに、そこからはじまるのだ。

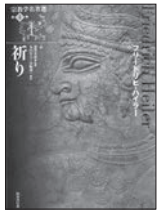
物事のはじまりとは、その存在と時間のはじまりである。そうであるならば、何か新しいことがはじまるときには、つねに、神の創造に通じる奇蹟があるのではないだろうか。驚くべきことに、福音書の記者はこのような神のことばがわれわれにも備わるという。「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている」。つまり、この神のことばこそが人間の生命であり、それは人間を内側から照らしている、と。聖書の文脈のなかで祈りが有意味でありうるのは、人間に神のことばと同じほどの力が備わるからであり、この意味で人間も創造の奇蹟を起こすことができるのである。

そうであるならば、祈るという行為は、かならずしも人間の弱さや愚かさを意味するわけではないだろう。それは、神や圧倒的な運命に抗して、人間の創造的な力を宣言することでもありうるのだ――ハンナ・アーレントは聖アウグスティヌスによる「創世記」の読解を敷衍しながら、人間の自由とはじめる力とを同一視した。困難にもかかわらず、よりよい未来を希んだり、大切な誰かのしあわせを願ったりすることがあるだろう。その思いがことばになり、さらにそのことばがおこないに結び付くなら、祈りははじまりのための第一歩ですらありうるのだ。

まるやま・たかお　世界言語社会教育センター講師　哲学・宗教学

文献案内

フリードリヒ・ハイラー『祈り』深澤英隆監修、丸山空大・宮嶋俊一訳、国書刊行会、二〇一八年

『聖書』引用は新共同訳（日本聖書協会）による。新約聖書本文と同時代のユダヤ教との関係については、たとえば *The Jewish Annotated New Testament* (Oxford University Press, 2011) などを参照するとよい。

ハンナ・アーレント『過去と未来の間』引田隆也・齋藤純一訳、みすず書房、一九九四年